

主題非明示型結果構文の概念化の世界 — 認知文法と共同注意によるアプローチ —

對馬 康博

1. はじめに

本稿の主たる目的は2つある。ひとつは現象面であり、著者の一連の先行研究(對馬 2007, 2010b, to appear), Tsushima(2008, 2010a)で「主題非明示型結果構文 (Implicit Theme Resultative Constructions)」(以下、ITRCと略すことがある)と呼ぶ言語現象の概念化の世界を「認知文法(Cognitive Grammar)」の観点から検証することにある。以下のITRCを見よう。

(1) a. These revolutionary brooms sweep cleaner than ever.

b. Concentrated washing powders wash whiter.

(Aarts 1995: 85)

この構文の存在自体は(Aarts 1995, 1997)が初めて指摘したものである。¹この構文の最大の特徴として主題が非明示化されているということが挙げられ、例えば、(1a)では掃くことができる「床(floors)」などであり、また(1b)では「洗える物(clothes, shirts, sheets)」などであると想定できる。さらに、この構文の二次述語は統語上非明示化された主題の結果状態を表す結果述語として考えることができる。また、この構文の意味として主語名詞句の属性を表し、その属性のおかげで非明示化された主題が結果述語で示される結果状態に至る可能性があるものとして分析できる。以上の点からこの構文の形式と意味を以下のように示すことができる。

(2) 主題非明示型結果構文の形式(**Form**)と意味(**Meaning**)の定義：

Form: [NP₁ V ϕ RP (AP or PP)]
 X Y Z

(ϕは統語的に非明示化されていることを示す)

Meaning: [X (in virtue of Property) ENABLES Y to BECOME Z]

(Tsushima 2010a: 123)

さらに對馬(2007)及び Tsushima(2008, 2010a)は上記の意味が中間構文から「属性」という意味を、また結果構文から「結果」という意味を継承しつつも、ITRCは独自の構文的環境を有している部分があるため、構文カテゴリーとしてはこれらの中間構文と結果構文と「家族的類似性(family resemblance)」(Wittgenstein 1953)に基づきながらも、独立したカテゴリーを形成している旨を主張している。

本論のもうひとつの目的は理論面であり、「共同注意(joint attention)」という概念を本稿が依る認知文法の観点から捉え直すかどうかという点である。詳しい議論は第3節に譲るが、この点は現象面を説明するための理論的基盤となるものであり、認知文法の枠組みではまだ整備が不十分であるため、本稿で整理してから用いる必要がある。

以上の点を踏まえて、本稿の構成は以下の通りである。まず次の第2節では現象面としてこれまでの先行研究で指摘されてきたITRCの構文的環境(constructional properties)の内、本稿と関連がある項目を取り上げ、それに関わる先行研究の分析を紹介し、合わせて問題の所在も提示する。第3節は理論面として本考察が立脚する「認知文法(Cognitive Grammar)」の基本概念の内、本稿が関わるものを取り上げ、基本的道具立てを整理・整備しつつ紹介する。第4節では、2節の現象面で問題となった点の解決を含め、ITRCにおける概念化の世界を3節で明らかにする理論面の認知文法のアプローチから解法を提案する。第5節は結論である。

2. 主題非明示型結果構文の構文的環境の点描と それに関わる先行研究の分析

對馬(2007)及び Tsushima(2008, 2010a)では ITRC は他の構文にはない形式と意味を含めた独自の環境を有していると考えられているが、本稿では上掲の先行研究で明らかになっている環境のうち本考察に関連がある項目を取り上げ、それに関わる先行研究の分析を紹介し、さらに問題点を指摘する。

2.1 主題非明示型結果構文の構文的環境の点描

まず、ITRCの主題の環境から考察したい。第1節でみたように、主題は下記の例のように統語的には非明示的である(下記の例では ϕ で示されている)。

- (3) a. Our new washing powder washes ϕ whiter!
- b. Our new washing machine washes ϕ cleaner!
- c. Concentrated washing powders wash ϕ whiter.
- d. These revolutionary brooms sweep ϕ cleaner than ever.

しかしながら、Aarts(1995)が以下に主張するようにコンテキストや我々の百科事典的知識から結果述語が何についての述語なのか明白な場合に主題を統語的に非明示化することが可能であるということは、裏を返せば主題は意味上・概念上は有意味であると考えられる。

- (4) [...] we might be led to surmise that an object can remain implicit in English expressions involving resultative secondary predicates if the context or knowledge of the world make it clear what entity these secondary predicates are predicated of.

(Aarts 1995: 86)

(4)の非明示化の条件に従えば、非明示化された主題は概念上(3a-c)では「洗える物(clothes, shirts, sheets)」などが想定されるし、また(3d)では掃くことができる「床(floors)」などが想定されるわけである。

また、次の例が示すように概念上想定される主題として非限定的な、つまり不定名詞句に限られているということも注目すべき点である。

(5) Our new washing machine washes ϕ cleaner.

ϕ = clothes / shirts / sheets

$\phi \neq$ *these clothes / *the shirts / *Mary's clothes

次に ITRC の主語名詞句について考察する。上掲(3)の例から明らかのように、ITRC の主語は道具主語が典型例として考えられ、何らかの文脈が想定されない限り、(6)のように人を主語とするものは許されない。² さらに、人を主語として道具を with 前置詞句で言語化する(7)の事例もかなり容認度が低い。

(6) a. *Mary washes cleaner.

b. *My mother/The cleaning woman sweeps cleaner than ever.

c. *John polishes cleaner.

(7) a. ??/*Mary washes cleaner with our new washing machine.

b. ??/*My mother/The cleaning woman sweeps cleaner with these revolutionary brooms than ever.

c. ??/*John polishes cleaner with the new mop.

また次の例に挙げるように、道具主語でも限定詞によって限定された定名詞句(8a)の場合や不定名詞句でも複数形不定名詞句(8c)の場合には容認されるが、(8b)のような単数形不定名詞句は容認度が低い。

- (8) a. The washing machine (we bought last week) washes cleaner!
b. ??A washing machine washes cleaner!
c. New washing machines wash cleaner!

さらに ITRC のとる時制とアスペクトについて考察しよう。典型的な ITRC では(9)に挙げるように、現在時制をとる傾向が強く、(10)のように過去時制にするとかなり容認度が下がってしまう。³

- (9) a. Our new washing machine washes cleaner (than the old one)!
b. These revolutionary brooms sweep cleaner than ever.
c. The new mop polishes cleaner.

- (10) a. ??Our new washing machine washed cleaner.
b. ??These revolutionary brooms swept cleaner than ever.
c. ??The new mop polished cleaner.

またアスペクトを明らかにするために in 句か for 句のどちらと共起するののかというアスペクトテストと行くと、(11)のように in 句とは共起しないが、for 句とは共起することがわかる。

- (11) a. *Our new washing powder washes whiter in a year!
a'. Our new washing powder washes whiter for years!
b. *These revolutionary brooms sweep cleaner in a year.
b'. These revolutionary brooms sweep cleaner for years.

このことから、ITRC は「未完了プロセス(imperfective process)」として捉えられていることが分かる。

以上のように、ITRC には特有の構文的環境があるが、それに関わる先行研

究の分析とその問題点について次の節で概観していく。

2.2 言語現象の分析に関わる問題の所在

2.2.1 非明示化された主題

2.1節でみたように ITRC では、主題が非明示化されているわけであるが、(4)の Aarts(1995)の主張でみたような条件で非明示化されているというわけである。さらに Goldberg(2001, 2005 a, b)は語用論の観点から次のように主張している。

- (12) **A Principle of Omission under Low Discourse Prominence:** Omission of the patient argument is possible when the patient is constructed to be deemphasized in the discourse vis a vis the action. That is, omission is possible when the patient argument is not topical (or focal) in the discourse, and the action is particularly *emphasized* (via repetition, strong affective stance, discourse topicality, contrastive focus, etc.).⁴

(Goldberg 2005b: 230)

つまり、主題は談話の中でトピックではなく、特に行為が何らかの理由により強調される場合に省略可能となるということである。また、Goldberg(ibid.)はこの原理が適応される前提条件として、Rice(1988)などの言う「意味的復元可能性(semantic recoverability)」が関与していると言う。言い換えれば、(13)が(12)の必要条件となるわけである。

- (13) Objects that can be omitted tend to be those whose lexical content is most probable given the meaning of the verb. Omitted objects are generally restricted to complements with a low degree of semantic independence from the verb. There are many verbs whose omitted objects are clearly understood because they are inferred from a very narrow, if not exclusive, range of

possibilities. The lexical identity of the object easily induced.

(Rice 1988: 203-204)

要点を述べれば、目的語が省略可能なのは、その目的語が動詞の意味に依存しており、そこから簡単に復元できる可能性がある場合ということとなる。

このことを確かめるために次の例を見よう。

- (14) a. John smokes.
b. John drinks.
c. When he goes to Boston, John drives.
d. Each afternoon, John reads.

(ibid.: 204)

Rice (ibid.)によれば、(14)では元々は他動詞なのだが、目的語の脱落が起こっていると述べている。彼女によれば次のような目的語が省略されているという。

- (15) a. John smokes (cigarettes/*Marlboros/*SMOKING MATERIALS).
b. John drinks (alcohol/*gin/*water/*coffee/*LIQUIDS).
c. When he goes to Boston, John drives (a car/*a Toyota/*a motorcycle/*A VEHICLE).
d. Each afternoon, John reads (a book/*Ulysses/*the newspaper /*PRINTED MATTER).

(ibid.)

これらが物語っていることは、脱落した目的語は標準的解釈では大文字(capital)で示されているような当該カテゴリーのスキーマ的(schematic)もしくは上位レベルカテゴリー(super-ordinate)や下線の引かれた下位レベルカテゴリー(sub-ordinate)のものではなく、無標で示されている動詞の典型的補部として解

積できるものであるということである。言い換えれば、(13)の主張が遵守され、脱落した目的語は動詞や文で表されるイベントから「復元可能(semantic recoverable)」なものということとなる。この概念を ITRC に限定して適用して考えてみると、この主張は先の(4)のAarts(1995)による主張の一部にほぼ相当すると思われる。

以上の点を含め、Tsushima(2010a: Ch.4)では ITRC のみに照準を当てて、主題が非明示化される認知的メカニズムを次のように提案している。

(16) The Cognitive Mechanism of Object Omission of ITRCs:

Object omission in ITRCs occurs (i) when the particular object is fairly unimportant as the pragmatic focus is on the activity itself, and (ii) when the identity of each of the omitted objects is easily induced from the context of the script of the verbal event or from associations engendered by other lexical items in the string.

(Tsushima 2010a: 76)

つまり、ITRC の主題は、(i) 語用論的焦点が行為自体に当てられており、目的語がそれほど重要ではなく、かつ(ii)非明示化された目的語が動詞のスクリプトや文全体のコンテキストから容易に推論可能な場合に非明示化されるということになる。

しかしながら、(i)に関して、語用論的焦点が行為自体に当てられ、目的語がそれほど重要でなくなると、なぜ主題が非明示化されるのだろうか？我々のより根本的(radical)な認知の視点から考える必要がある。この点に関しては4.2節で議論したい。

2.2.2 主語名詞句としての道具主語

2.1節で概観したように、典型的な ITRC の主語名詞句は(3)の事例のように道具主語であり、(6)と(7)のように人間主語の場合は著しく容認度が下がる。

その理由は Tsushima(2010a)では、ITRC は道具主語名詞句がその指示対象の「属性(property)」を描写する属性文であると考えているからである。ここで言う属性とは次の Jespersen(1927)の意味である。

- (17) The sentence is therefore is descriptive of something that is felt as characteristic of the subject, and therefore the verb generally requires some descriptive adjective or adverb [...].

(Jespersen 1927: 351)

つまり、下線部の通り「属性」とは主語の特性として感じられるものの記述として捉えられるものである。⁵

對馬(2010a, to appear)は道具が主語として認定される条件として、認知主体は道具主語が人間からある程度独立し、自律的に行為を遂行するための属性を有していると捉えている場合に容認されることを指摘している。次の例をみよう。

- (18) a. Our new fully automatic washing machine washes cleaner.
b. Our new detergent-free washing machine washes cleaner
c. Our new twin-tub washing machine washes cleaner.
d. *Our new washboard washes cleaner.

(對馬 2010a: 230, 對馬 to appear)

(18a-c)の「全自動洗濯機」、「洗濯剤不要の洗濯機」、「2層式の洗濯機」はそれぞれ機械仕掛けなどの複雑なメカニズムをもち、人間が一旦ボタンを押せば、あとは自律的に洗濯をするという事態を引き起こす属性を持っているため容認されているが、(18d)の「洗濯板」にはそのような解釈がおこらないため容認されていないわけである。

しかしながら、ここで重要となるのは、(18)の事例の通り、道具主語名詞句

は自律的に行為を遂行するための属性を有しているわけであるが、その背後には必ずボタンを押すなどの行為を間接的に操作する「人間」が関与しているはずである。もちろん、人間は間接的にしか関与していないので、言語化はされていない。そのような言語化されてはいないが、間接的に関与している人間の存在をどのように考慮すべきであろうか？この点に関しては4.1節で議論したい。

2.2.3 ITRCの現在時制と未完了相

2.1節で概観した通り、(9)のように典型的なITRCは現在時制であり、(10)のように過去時制にすると容認度がかなり下がる。また、(11)でみたように、典型的なITRCは未完了プロセスで捉えられているわけである。なぜITRCはこのような環境を示すのであろうか？これには先に見たようにITRCが「属性文」であることが関与していると思われる。一般的に言って、中間構文などの属性文は現在時制が多いわけであるが、人間の認知の観点から言って、主語名詞句の属性を表す属性文、つまりここではITRCに限定して考えるが、なぜ現在時制が典型であるのだろうか？この点に関しては4.2節で議論したい。

以上、第2節では、現象面の観点から典型的なITRCの構文的環境を点描し、その後先行研究と絡めて、分析上の問題点の所在を明らかにした。本稿での立場は第4節で議論していく。

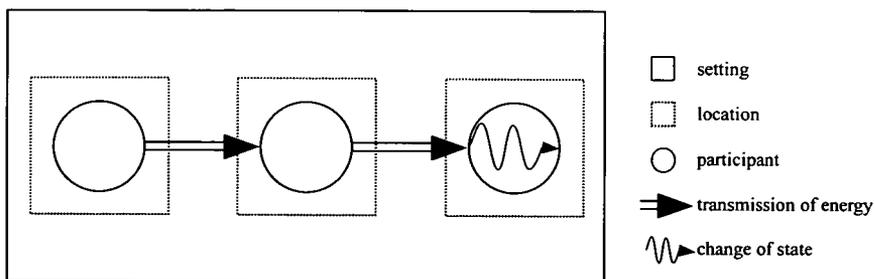
3. 認知文法の基本的概念

この節では理論面の観点から「認知文法(Cognitive Grammar)」の基本概念の内、本考察に関わるものを取り上げ、基本的道具立てを紹介する。ただし、ただ紹介することにとどめるのではなく、整理・整備する必要がある概念に関してはその都度本稿の立場を表明していくこととする。この節で取り上げる概念は「アクション・チェーン・モデル(action chain)」、「コントロール・サイクル・モデル(control cycle)」、「共同注意(joint attention)とグラウンディング(grounding)」

「プレーン・モデル(plane)」の4つである。特に本稿では共同注意に関しては認知文法のコントロール・サイクル・モデル、グランディングとの観点から新たなモデルを提案する。

3.1 アクション・チェイン・モデル (action chain)

認知文法では「事態認知構造(event structure)」、つまり、我々が出来事を認知する構図には、「実体(entity)」すなわち、モノ(thing)や出来事(event)を心の中に描く認知主体(conceptualizer)がその実体の内容(つまり「概念内容(conceptual content)」)をどのように解釈するのかという「捉え方(construal)」が深く関わっていると考えている。捉え方とは認知主体が同じ状況を様々な方法で知覚し思い描く認知能力のことである。つまり、同じ状況でも我々がどこに焦点を当てるのか(「焦点調整(focusing)」)やどこの位置から物事を描くのか(「観点(perspective)」)によって言語表現も異なることとなる。特に英語では我々はある事態を捉える際に舞台の外から眺めて、出来事の参加者・物としての「参与体(participant)」の間に非対称的(asymmetric)なエネルギーの伝達作用、すなわち、一方の参与体からもう一方への力の流れを見いだそうとする。そういった認知の仕方を「アクション・チェイン・モデル(action chain model)」と呼び、この構図を図1に示す。



(Langacker 1987: 383)

図1 : アクション・チェイン・モデル

この図式では左から順に力の源となる最初の参与体(head/energy source)が力を発し、次の参与体がそれを受け取り、さらにその力を次の参与体に伝達していき、最終的に力を受け止める参与体(tail/energy sink)が変化をするという「力の連鎖」の構図を表している。

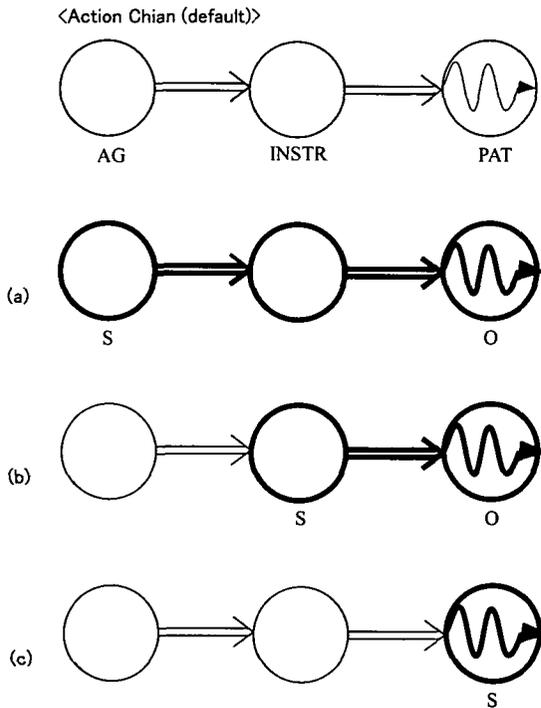
ここで、例として典型的な他動詞構文の“John broke the glass with the hammer.”という事例を考えてみよう。この事態構図には3つの参与体として、力を発する参与体(John)、その力を受け取りさらに次へと力を伝達する参与体(the hammer)、そして最後に力を受け止め変化する参与体(the glass)が関与している。これらはそれぞれ類象的(iconic)に動作主(agent, AG)、道具(instrument, INSTR)、非動作主(patient, PAT)に相当する。つまり、この事態は **AG** ⇒ **INSTR** ⇒ **PAT** へと力が流れていく様子を認知主体が心に想起したものである。この構図は図2(a)に図示されている。太字は「プロファイル(profile)」といい認知主体の捉え方の中で認知的に際立っている(prominent)という意味である。認知文法では際立っている(プロファイルされている)中でも一番際立っているものを「トラジェクター(trajector, trと表記)」と呼び、二番目に際立っているものを「ランドマーク(landmark, lmと表記)」と呼んでいる。図2(a)では“John”がtrで主語(S)として、“the glass”がlmで目的語(O)として言語化されている。

次に“The hammer (easily) broke the glass.”という事態を考えてみよう。ここでは先の例でプロファイルされていた力の発揮する存在としての最初の参与体、つまり、trである“John”が認知主体の捉え方によって際立ちの対象から外され、INSTRである“the hammer”が際立ちの対象として一番目立つtrとして昇格し、故に主語(S)として言語化されており、それが力を発揮する存在となっている。この関係は図2(b)に示されている。ただし、ここでは道具としての無生物であるハンマーは自ら意志を持って自律的に行為を行う存在ではないため、際立ってはいないがその背景にはそれを操作する人間が必要であるので図2(b)ではAGに相当する一番左の参与体が細線で示されていることに注意されたい。

最後に“The glass (easily) broke.”という事態を考えてみよう。ここでは力を受け取り変化する存在としてのPATだけが認知主体の捉え方により際立って

trに昇格し、主語(S)として言語化されている。この様子は図2(c)で示されている。ただし、第2の事例同様に glass が勝手に割れるということは考えにくいため、その事態に至らせたはずの AG と INSTR が背後にあると考えられるため細線で示されている。

このように典型的な英語の事態認知において認知主体はある参与体から他の参与体に力が流れていくという構図を想起するが、ここで注目したいのは必ず左側の参与体から非対称的に力が流れていくという「自然経路(natural path)」に即しており、決してその逆はないということ、換言すれば、一番際立つ参与体としてのtrを含み、その右側をプロファイルの対象としているわけである。

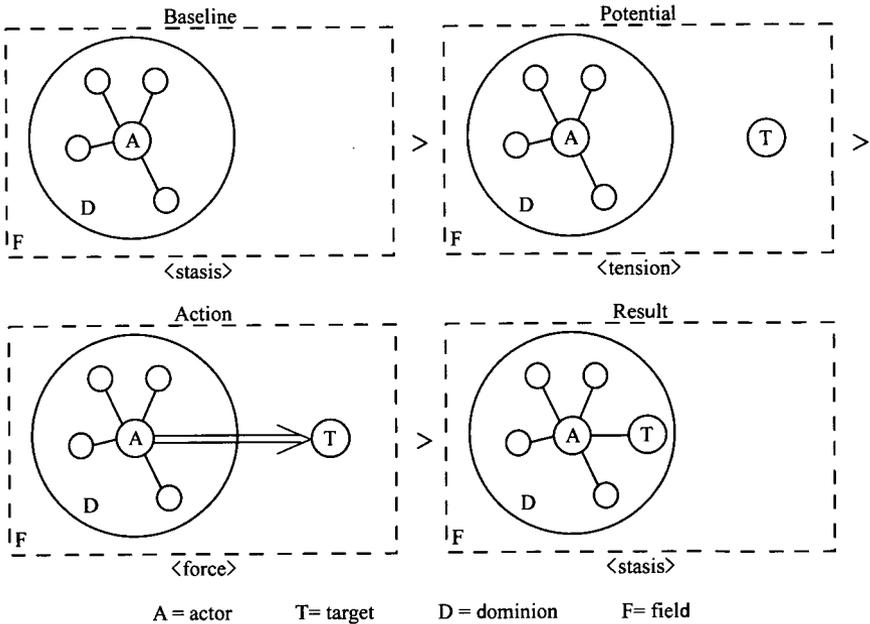


(Langacker 1990: 217)

図2：John broke the glass with the hammerの事態認知

3.2 コントロール・サイクル・モデル (control cycle)

我々生物は食物連鎖等の支配関係が蔓延る環境世界の中で生きている。それを受け認知文法では「コントロール・サイクル(control cycle)」という支配関係を捉える際の認知モデルを図3のように提起している。具体的にはコントロール・サイクルの根底(baseline)には行為者(actor)、場(field)、標的(target)、支配域(dominion)の4つの部品がある。これが緊張状態(tension)になると行為者は標的が場に存在することを意識する。そして次に行為者は標的を捕らえようと力を発揮する(force)。その結果、行為者は標的を捕らえ自らの支配域の中に取り込む(stasis)。



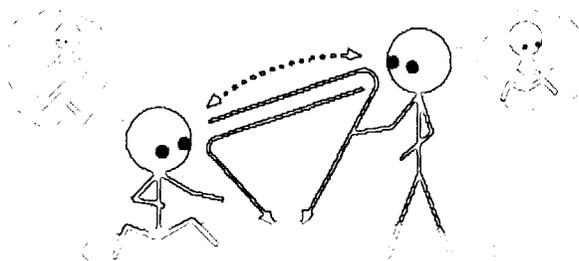
(Langacker 2002a: 193)

図3：コントロール・サイクル

ここで具体例として Langacker(2002a)に基づきネコ(cat)とネズミ(mouse)の支配関係を考えてみたい。基底段階(Baseline)では行為者(A)としてのネコは休んでいると考えられるが、次の潜在段階(Potential)では標的(T)としてのネズミがネコの意識(F)の中に入ると、ネコは潜在的にそれを捕らえようとし始める。次の行動段階(Action)において、ネコはネズミを捕らえようと行動し、最終的な結果段階(Result)としてネズミはネコの支配領域(D)の中に入り捕らえられ、ネコの支配下に置かれることとなるわけである。

3.3 共同注意(joint attention)とグランディング(grounding)

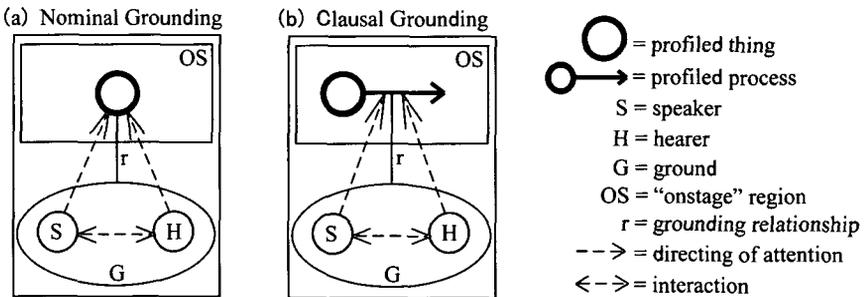
共同注意(joint attention)とは本来は「発達心理学(Developmental Psychology)」の分野で展開してきた概念である(cf. 大藪 2004a, b)であるが、言語学の分野でも Tomasello(1999, 2003)が言語習得の過程を説明する道具立てとして、また本多(2011)や Verhagen(2005, 2007)らの間主観性(intersubjectivity)の中でも取り上げられることが多い。⁶ また最近の Langacker(2009)の認知文法の枠組みの中でも“joint attentional control”(ibid.: 169)や“joint attention”(ibid.: 170)という用語が見受けられる。認知言語学の立場では本多(2011)などが共同注意という概念を積極的に取り入れている。共同注意とは簡素に定義すると「他者と一緒に同じものに注意を向けること」(ibid.: 127)であるという。⁷ この三項関係は次のように図示される。



(小嶋: <http://www.myu.ac.jp/~xkozima/carebots/development.html#lang>)⁸

図4： 共同注意の構図

次に認知文法のグランディングの概念に移る。「グラウンド(ground)」とは認知の拠点となるものであるが、参与体としての話し手と聞き手がモノ(thing)や事態(process)を現実とどのように関係づけて叙述するのかということである。⁹従ってこれには「発話事態(speech event)(つまり、コミュニケーションそのもの)」、「参与体として話し手と聞き手(speaker and hearer)」、「参与体間のインタラクション(interaction)」、そして発話時や発話の場(具体的には「今、ここ」といった「直接的状況(immediate circumstances)」といった関係を含む。モノや事態をグラウンドする要素のことを「グラウンド要素(grounding element)」というが、名詞句(nominal)としてのモノをグラウンドする要素には限定詞の *the, this, that, some, a, each, every, no, any* などが挙げられるが、これにより名詞をグラウンドすることで話し手は聞き手に意図した談話上の指示対象に注意を向けさせることとなる。一方、定形節によりグラウンドされるプロセスのグラウンド要素は三人称単数現在の形態素 *-s*、過去形を示す形態素 *-ed* や法助動詞 *may, will, should* などが挙げられるが、これにより、プロセスは話し手による事実認識に関係付けられることとなる。この様子を示したのが図5である。



(Langacker 2009: 150)

図5：グランディング

この図式で示されているように、グラウンドそれ自体は舞台の外(offstage)からモノや事態を眺めて認知している構図となっている。そのため認知主体である

話し手(S)と聞き手(H)は主観的に舞台上の客体(太線丸及び太線丸と矢印)に注意を向ける(破線単方向矢印)こととなるが、舞台の外(offstage)、いわば観客席にいる認知主体としての彼らは基本的にプロファイルされることはない。¹⁰ ここで注目すべきは認知の拠点において舞台の外にいる話し手(S)と聞き手(H)は個別に舞台上の客体をただ眺めているわけではなく、互いにインタラクション(interaction)(破線双方向矢印)をはかっているということである。よってここで認知主体としての話し手(S)と聞き手(H)、それにプロファイルされる客体という「三項関係」が成り立つわけである。

このように観察してみると、先の「共同注意」という概念と「グランディング」に接点が見えてくる。つまり、実際の発話事態の場における構図は認知主体の一人である話し手(S)がもう一人の認知主体である聞き手(H)に発話等のインタラクションを通じて舞台上の客体に注意を向けさせるということであり、故に話し手と聞き手が同一の実体に注意を払っているということになる。これは先にみた共同注意に他ならないわけである。ここで図5のLangackerのモデルを改良することでグランディングと共同注意の関係の精密化を試みたい。図5ではインタラクションは破線双方向矢印で示されているが、単にそれだけではなく発話事態を通じて話し手(S)が聞き手(H)に客体に注意を向けさせることを明確に示すために図6の通り話し手(S)から聞き手(H)に向けて力動関係(force-dynamics)を示す二重矢印線を示すことで、グランディングと共同注意の関係を明確できることを提案したい。

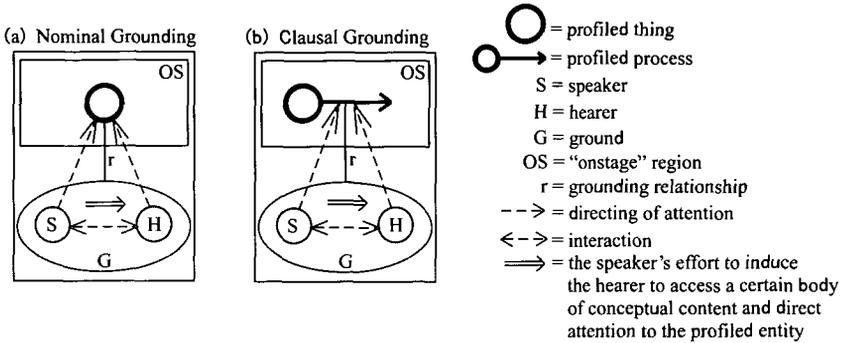


図6：グランディングと共同注意の統合モデル

図6で力動関係を示す二重矢印線を示すことには以下の点で利点がある。これには3.2節でみたコントロール・サイクルが関与する。つまり、話し手(S)が聞き手(H)に客体に注意を向けさせるプロセスを段階的に詳細に特徴づければ力動的(force-dynamic)なコントロール・サイクルにより分析可能なわけである (cf. Lancacker 2009: 168)。本稿では具体的にコントロール・サイクルを用いて共同注意を分析できるモデルとして図7の認知構図を提案する。まずコントロール・サイクルの初期状態としての基底段階には話し手(S)と聞き手(H)があり、両者の間には破線双方向矢印で示されているようにインタラクションがあり、実際の発話事態では意思疎通がとられている。また、話し手(S)は客体としてプロファイルされる(O)に注意を向けている (Sから伸びる破線単方向矢印) が、聞き手(H)は客体が意識野(F_H)の中にも注意の対象となる領域(D_H)にも存在していないと思っている。第2の潜在的段階において、二重線矢印で示されているように話し手(S)は客体(O)を聞き手(H)の意識野(F_H)に導入して、聞き手(H)はその存在に気がつく。¹¹ さらに次の段階として話し手(S)は聞き手(H)に客体(O)に注意を払わせようと試み、聞き手(H)は客体(O)を注意の領域(D_H)に取り込もうとする。この様子はそれぞれ2つの二重線矢印で表されている。¹² 最終段階として、聞き手(H)は客体(O)に注意を払うようになり (Hから伸びる破線単方向矢印)、結果として話し手(S)も聞き手(H)も客体

(O)に注意を払うこととなり「共同注意」が成立するわけである。

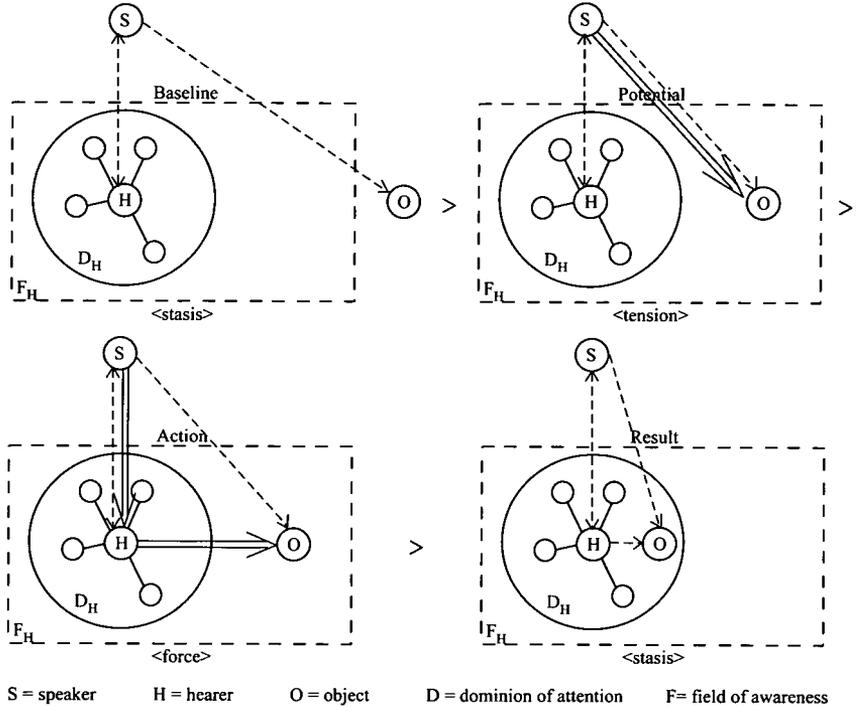


図7：コントロール・サイクルと共同注意¹³

先のグランディングの観点からすればこのように認知主体である話し手(S) (と聞き手(H))が客体(O)に注意を向けることで客体(O)をグラウンドしていると考えることが可能となるわけである。

3.4 プレイン・モデルタイプ・プレイン、アクチュアル・プレイン、ヴァーチャル・プレイン

我々が言語によって世界のモノや出来事を語ろうとするとき、どのように世界を捉え概念化しているのだろうか？まずはこれを確かめるために次の主張と

例を見よう。

- (19) We may note that one may describe the world in either of two ways: by describing what things happen in the world, or by describing how the world is made that such things may happen in it.

(Goldsmith and Woisteschlaeger 1982: 80)

- (20) a. The engine isn't smoking anymore.
b. The engine doesn't smoke anymore.

(ibid.: 81)

(19)が言わんとすることを簡素に述べれば、我々は世界を描写しようとする時、2つの方法があるということである。ひとつは世界の中で実際に生じることを報告しようとする方法 (Goldsmith and Woisteschlaeger の用語で言えば “phenomenal”) であり、もうひとつは世界の中で物事が生じうる可能性を語ろうとする方法 (“structural”) である。後者は言い換えれば、認知主体の心の中でのみ物事の生じる可能性を思い描く世界を報告する手段となる。これを基に(20)の出来事を考えてみよう。最近車のエンジンから煙が良く上がり、それを修理したという状況を想定すると、(20a)は実際にエンジンをかけてみてエンジンから煙が上がっていないことを観察・確認して報告しているのに対して、(20b)はそのような観察はしなくとも修理を終えた段階で、エンジンはもう恒常的に煙をあげないものだという主語名詞句の属性に対する話し手の認識を報告していることとなる。¹⁴

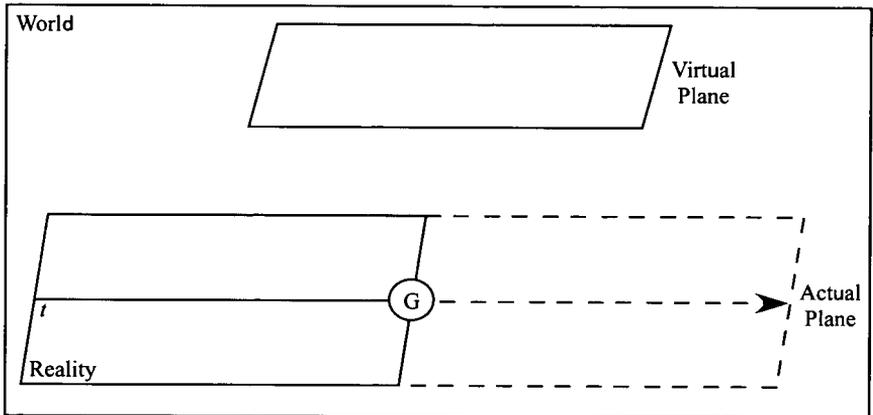
さらにもう一例みよう。

- (21) a. Adam ate an apple.
b. Serpents seldom seem sincere.

(Langakcer 1999b: 78)

(21a)で我々が表したいことは現実に生じた出来事の描写である。一方(21b)では現実世界に言及されている事態やモノが存在しているのではなく、それらが存在しているのはあくまでも認知主体の概念の中にすぎない。つまり、現実に生じたことを表しているわけではなく、仮想上の陳述である。

このように考えてくると、我々は「現実的(actual)」な物事として語る場合と「仮想上(virtual)」の物事を語ろうとすることができ、裏返せば世界は現実的な側面と仮想上の世界から成立していることになる。このように我々は世界を現実的と仮想的に語る言語的・概念的基盤を有しているわけであるが、この世界観は図8で図示される。



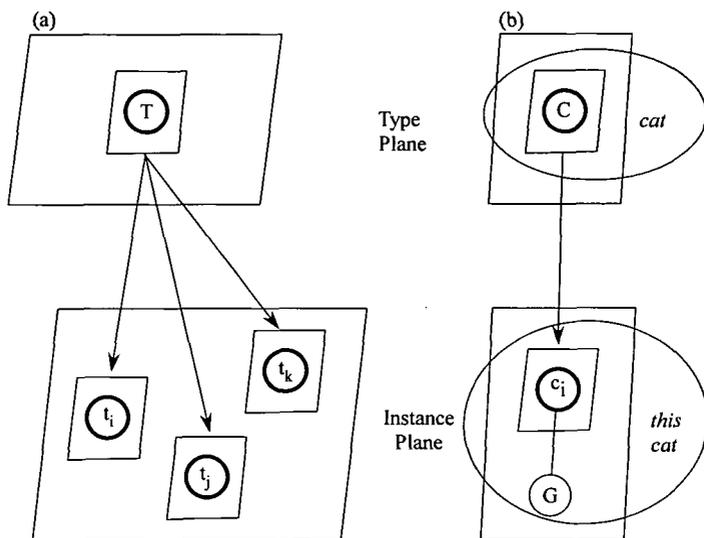
(ibid.: 79)

図8：世界観：現実的(actual)と仮想上(virtual)

認知文法では、こうした世界観を表すために、我々の概念上に大別して2つのプレイン(plane)という概念空間が存在すると考えている。¹⁵ 具体的に言えば、「現実(もしくはアクチュアル)・プレイン(actual plane)」と「仮想(もしくはヴァーチャル)・プレイン(virtual plane)」である。アクチュアル・プレイン上は現実的に実際に生じた(過去)、生じている(現在)、もしくは生じると予

測される(未来)の事態やモノを想起するための概念空間であるが、一方のヴァーチャル・プレイン上は現実に生じると考えられる事態やモノのためではなく、あくまでも仮想上のものを思い描くためのものである。先の(20), (21)の例で言えば、(20a)と(21a)はアクチュアル・プレイン上で想起される現実に生じる出来事を報告するものであるが、(20b)と(21b)はヴァーチャル・プレイン上でそれぞれ主語名詞句の属性や総称といった事態を述べたものであると言える。

また、別の区分として、あるモノや事態を特徴づける際には伝統的にはタイプ(type)とトークン(token)という区分をすることがある。タイプとはその名称の通り具現的なものではなく種類を表すものであるのに対して、トークンとはそのタイプの具体的事例を表す。認知文法ではこれらをそれぞれタイプ(type)とインスタンス(instance)と呼び、これらの区分は語彙レベルの名詞(noun)や動詞(verb)とグラウンドされている名詞句(nominal)と節(clause)との区別に相当するものとする。また前者を表すための概念空間を「タイプ・プレイン(type plain)」と呼び、後者のためのものを「具体事例(もしくはインスタンス)・プレイン」と言い区別する。この区分は次の図のように整理することができる。



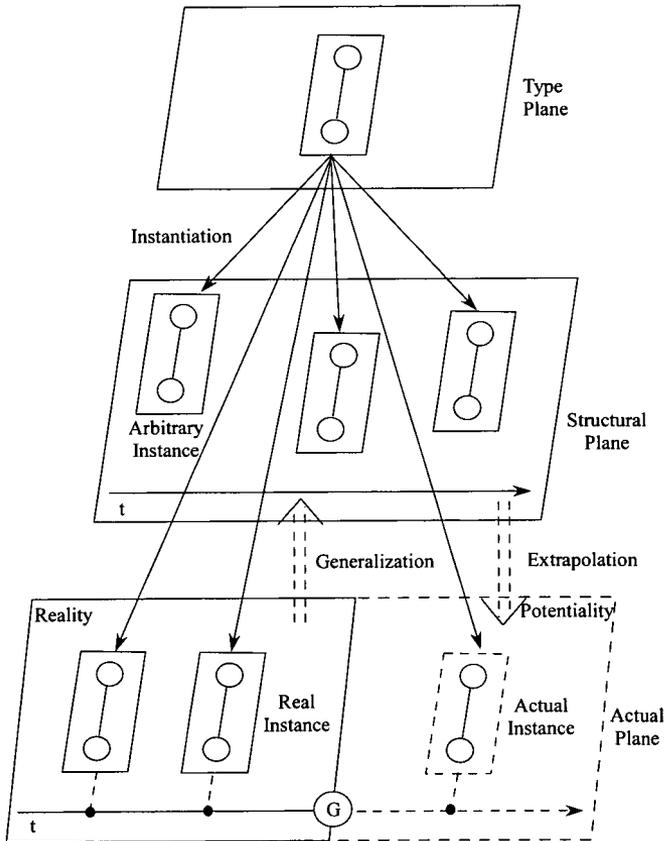
(Langacker 1999a: 271)

図9：タイプ・プレインとインスタンス・プレイン

左図がこれらの関係を一般化したもので、表記上タイプ・プレイン上で想起されるタイプは(T)に対して、それを具現化したインスタンス・プレイン上で想起されるインスタンスは(t_i , t_j , t_k)と表記してある。右図で具体例をみるために「ネコ(cat)」というモノについて考えてみよう。まず、タイプ・プレイン上では動物の種類としての「ネコ」という漠然としたタイプを表している。これがインスタンス・プレイン上で具現化されると、話し手と聞き手(図中ではGで表記)によって this cat のように限定詞によりグランドされ(図中ではGと c_i の間の細線で表記)、具現化される(図中Cから c_i を囲む四角へ伸びる矢印線で表記)わけである。

ここまではアクチュアル・プレイン、ヴァーチャル・プレイン、タイプ・プレイン、インスタンス・プレインを概観してきたが、これらの関係についてまとめてみたい。まず、前者2つのアクチュアル・プレイン、ヴァーチャル・プレインは具体的事例について語るためのスペースであり、これらはインスタ

ス・プレインの下位分類である。従って、次の図に示すように整理すると、タイプ・プレインがあり、またその具体的事例を想起するインスタンス・プレインがあり、インスタンス・プレインの中にアクチュアル・プレインとヴァーチャル・プレイン（図中では structural plane と表記されているがこれはヴァーチャル・プレイン(virtual plane)に相当する）が下位区分として存在することとなる。



(Langacker 1999a: 275)

図10：タイプ・プレインとインスタンス・プレイン（ヴァーチャル（ストラクチャル）プレイン・アクチュアル・プレイン）

次に注目したいのはアクチュアル・プレインとバーチャル・プレインとの関係とアクチュアル・プレインとタイプ・プレインの関係である。まず前者の関係から考察すると、先に見たようにアクチュアル・プレインは現実のモノや事態を把握するための空間であるのに対して、ヴァーチャル・プレインは仮想上のモノや事態を描くためのものである。仮想上のモノや事態を思い描く際にはただ漠然と想起するのではなく、現実のモノや事態を「一般化(generalization)」、言い換えれば「抽象化(abstraction)」して思い描くこととなる。これに関して次の Langacker の主張が参考になる。

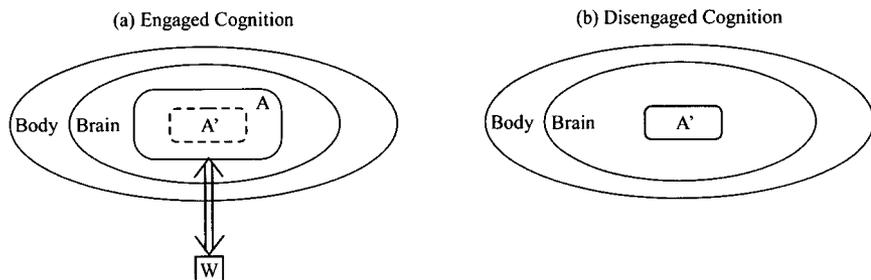
(22) [...] event instances in the structural plane (= the virtual plane) have no specific temporal location. These are arbitrary instances, conjured up just for purposes of expressing a generalization, namely that occurrences of the event type in question constitute one aspect of the world's structure and can thus be expected under appropriate circumstances. Multiple instances do then figure in the characterization of what the world is like, but these conjured instances do not project to particular locations in actual time, nor is there any specific number of them. The generalization they embody concerning the world's nature does however afford some basis for extrapolating the future evolution of reality in the actual plane.

(下線及び括弧内は著者による)(Langacker 1999a: 275)

下線部を要約すれば、ヴァーチャル・プレイン上で想起される具体事例は具体的に時間と結びつけられていない一般概念を表すために一般化され思い描かれた恣意的なものである。図10では、「一般化(generalization)」は上向きの二重矢印破線で表示されており、また、一般化によって生じる事例はアクチュアル・プレイン上で思い起こされる実際の特定された事例ではなくタイプの「恣意的(arbitrary)」なもの、いわば「代表例(representative)」として表示され、また特定の時間軸上との接点は結ばれていない。

例として Langacker (2008: 526) に従って “A tiger is a feline” について考えてみよう。これは現在時制でグラウンドされた定形節(プロセス(process))であると同時に2つの不定冠詞によってグラウンドされた名詞句(モノ(thing))を含んでいる。しかしここで注目すべきは、これらのプロセスやモノは全て仮想上のものであるという点である。つまり、これらは現実のものとしてではなく、現実のプロセスやモノを一般化してヴァーチャル・プレーン上で想起される恣意的なものであり、特定の時間とは無関係のいわゆる総称的(generic)に解釈されるものである。

ここでいう「一般化(generalization)」とは換言すれば「抽象化(abstraction)」と捉えられるが、これはどのような認知操作であるのかを次の図と共に考えてみたい。



(Langacker 2008: 535)

図11：外界直接型認知(Engaged Cognition)と
外界間接型認知(Disengaged Cognition)

まず、我々は自らの感覚や身体運動を通じて世界(左図中のW)とインタラクション(左図二重矢印線)することによって外界認知を図っている。この様子は「外界直接型認知(engaged cognition)」と呼ばれ左図に対応する。左図中のAとラベル付けされた四角形は事態認知における脳の処理活動を示している。またAの一部のA'と表示された四角形部分は外界(W)との直接的なインタラク

ションがなくなり、自律的に生じていくようになる脳内の処理活動を表している。左図の外界直接型認知構図では、脳内の処理と外界との直接的なインターラクションに基づいているため、A'部分が脳内でルーチン化された知識としてまだ確立されていないため破線で示されている。しかし、そのような外界との直接的な認知の中で、日常経験の様々な類似的出来事が経験的に繰り返し生じることにより強化されると、いつでも取り出せるような恣意的な形で我々の脳内に蓄積されてルーチン化されていくこととなる。そしてそれが直接的な経験とは別に自律的なものとして概念上シュミレーション(simulation)できる形となる(cf. 濱田・對馬 2011)。この認知操作の構図は Langacker (2008: 535)では「外界間接型認知(disengaged cognition)」として想定されて、その様子は右図で描かれている。右図中ではA'部分がルーチン化して固定化されているため実線で示されている。一般化・抽象化という観点からすると、まさにこの外界直接型認知から外界間接型認知への移行の過程こそが一般化・抽象化に相当する概念である。先のプレインとの関連で言えば、アクチュアル・プレイン上の具体的事例のモノや事態が上記のような認知操作を通じて抽象化されると、ヴァーチャル・プレイン上では概念上、具体個別事例とは遊離した一般化された恣意的なモノや事態として扱われることとなるわけである。

以上、第3節では、アクション・チェーン・モデル、コントロール・サイクル・モデル、共同注意とグランディング、プレイン・モデルなどを概観してきたが、本稿では特に、発達心理学で言われてきた「共同注意」という概念を認知文法の「グランディング」及び「コントロール・サイクル・モデル」と統合した(unified)、新たなモデルを提案した。

4. 主題非明示型結果構文の概念化の世界

この節では、第2節で概観した ITRC の分析上の問題点に関して、概念化の観点から第3節でみた認知文法の道具立てを用いて解決を試みていく。

4.1 主題非明示型結果構文の事態認知モデル¹⁶

本節では ITRC の事態認知モデルについて(23)-(25)の例と共に考えていきたい。後に分かるように、これを解明することで、特に ITRC の概念化において、道具(INSTRUMENT)や動作主(AGENT)の事態への関わり方が明らかになるからである。

- (23) a. Our new washing powder washes whiter! (Aarts 1997: 175)
 b. These revolutionary brooms sweep cleaner than ever. (=1a) (Aarts 1995: 85)
 c. The new mop polishes cleaner.

- (24) a. *Mary washes cleaner.
 b. *My mother/The cleaning woman sweeps cleaner than ever.
 c. *John polishes cleaner.

((6)を再掲)

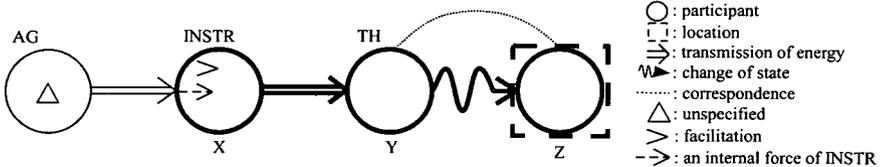
- (25) a. ??/*Mary washes cleaner with our new washing machine.
 b. ??/*My mother/The cleaning woman sweeps cleaner with these revolutionary brooms than ever.
 c. ??/*John polishes cleaner with the new mop.

((7)を再掲)

2.1節及び2.2.2節で明らかになったように、典型的な ITRC の主語名詞句は(23)の通り道具主語であり、ITRC はそれが持っている属性を描写する属性文ということであった。ここで認知的な観点から主語という概念に関して考えてみたい。先に触れた通り、ITRC の道具主語は行為遂行のためにある程度自律性を兼ね備えた属性を有するものとして考えられている。ここでいう自律性とは、Lakoff(1977), van Oosten(1977, 1984)などがいう「責任性(responsibility)」という概念と相通じるところがある。責任性とは主語名詞句には動詞句以下で言

語化される行為遂行を直接的に操作する(direct manipulation)のための責任があるという考え方である。言い換えれば、道具主語名詞句に行為遂行の責任があるが故に、ある程度自律性が高くなければならないということになる。典型的なITRCでは動作主として(24)及び(25)のように人間を主語に立てられず、道具しか用いない傾向があるということには、それなりの認知的理由があると考えられる。つまり、その理由とは話し手は行為者としての人間を背景化し、道具を敢えて前景化しているということは、行為遂行の責任が道具主語にあると考え、そこに注意(attention)を向けるが故にその事態の中で最も認知的に際立つ存在として認識しているからだと考えられる。また、共同注意の観点からすると、話し手は聞き手に対して敢えて動作主としての人間から注意をそらし、道具に注意を向けることで、その属性によって引き起こされる行為遂行に注意を向けているわけである。

以上の点を踏まえてITRCの事態認知モデルをアクション・チェインモデルの観点から捉えると次のようになる。



Form: [NP₁ V ϕ RP (AP or PP)]
 X Y Z

Meaning: [X (in virtue of Property) ENABLES Y to BECOME Z]

図12：ITRCの事態認知モデル

このモデルでは、太線はプロフィール（つまり、認知的際立ち）を表しており、INSTRとラベル付けされた道具が一番際立ち、トラジェクター(tr)として認識されるため、主語として言語化されている。またTHとつけられた主題は統語的には非明示化されているものの、概念上は有意味であるため、二番目に際立

つと考えられ、ランドマーク(lm)として認知されているため、目的語となっている。道具主語は特有の属性を有していると考えられるため、それは円内の破線矢印で示されている。また、その属性は行為遂行を促進(facilitation)すると考えられるためその様子は円内の横向き三角印で示されている。¹⁷ またそうした属性の行為促進によってエネルギーが発生するため、道具(INSTR)から主題(TH)に二重矢印線が引かれている。さらに、その力を受けた主題が結果述語で言語化される状態に変化するため、その状態変化はTHから伸びる曲線矢印で、さらに結果状態は破線四角で示されている。円同士を結んでいる点線は同一指示物であることを示している。

さらに、ここで注目すべき点は、上で見たように道具主語はある程度の自律性があり、行為遂行のための直接的操作としての責任が生じるのだが、その背景には際立たないため言語化できないものの、道具を間接的に操作する動作主としての人間が存在しているということである。(23)の例で言えば、動作主としての人間は(23a)では「洗剤を洗濯機に入れる、洗濯機を動かす」、(23b)では「箒を使って掃く・掃除をする」、(23c)では「モップを使って掃除をする」などといった間接的な形で事態に関与することとなる。しかし、(23a)では「新しい洗剤を使って洗った結果、衣類がより白くなる」や(23b,c)では「箒やモップを使って掃除した結果、床がよりきれいになる」という事態の直接的責任はその道具の持つ属性にあるものとして考えられるため、動作主である人間は事態を間接的に操作する存在として考えられるわけである。従って行為遂行に間接的にしか責任がない動作主としての人間は、(24)や(25)の通り、主語として言語化することもできないし、また(26)のように by 前置詞句で示すこともできない。

- (26) a. *Our new washing powder washes whiter by Mary / anyone!
 b. *These revolutionary brooms sweep cleaner than ever by Mary / anyone.
 c. *The new mop polishes cleaner by Mary / anyone.

つまり、こうした言語事実が物語っていることは認知主体が概念化において、事態に間接的に関わる動作主の存在を背景には感じているものの、その関与が直接的ではないため、敢えて前景として特定化する必要がないと言うことである。そしてこの様子は、図12のITRCの事態認知モデルの中では間接的に道具を操作する人間（動作主）はAGとラベル付けされた細円で示されており、これはプロファイルされていないが背景には存在しているということを示している。また動作主はどのような人なのか特定できないため、円内に三角で示してある。

以上、考察してきたように、ITRCの事態認知モデルを考慮することで、ITRCは属性文であり、さらにITRCの概念化の背景には言語化できないものの背景化された動作主が行為に間接的に関与していることが示され、それにより、道具主語はそれが持つ属性遂行の直接的操作を行う責任を持つ存在となるものとして自然な認知的基盤を与えることができると結論づけることができるわけである。

4.2 主題非明示型結果構文の概念化の認知プロセス・プレイン・モデル・共同注意からの解法一

4.1節の議論で明らかになったように、ITRCは動作主となるはずの人間を背景化し、道具主語名詞句の属性を前景化することを描写する属性文である。本節では属性文としてのITRCの事態を概念化する際に、認知主体にはどのような認知プロセスが働いているのかということについて、「プレイン・モデル」と「共同注意」の観点から明らかにしていく。これにより、ITRCの属性文解釈はどのようにして生まれるのか、また、なぜ主題が非明示化されるのか、さらに典型的なITRCはなぜ現在時制が多いのかという観点が明らかになる。

まず、属性文とはどのような文なのかということから考えたい。Krifka et al. (1995)によれば、叙述(predication)というのは「局面レベル叙述(stage-level predication)」と「個体レベル叙述(individual-level predication)」に2分できるという。簡素に述べると、前者は「時間の流れにそって進行していく行為や

事態を、ある特定の時間の局面で輪切りにした表現」(影山 2003: 273)であり、後者は「主語が恒常的に持つと思われる性質を述べる文」(ibid.: 274)として定義されるが、伝統的には前者は「出来事文(eventitive)」、後者は「属性文」と呼ばれるものに相当する。¹⁸

ここで、この2区分を人間の認知の観点から3.4節でみたプレイン・モデルを援用し捉え直したい。局面レベル叙述は出来事が時間軸に沿って現実には生じると考えられるため、我々はアクチュアル・プレイン上で個々の出来事として捉えていると考えることができる。一方、個体レベル叙述はアクチュアル・プレイン上で生じる個々の出来事を一般化し、それによって得られる一般化された主語名詞句の恒常的な属性に注目し、一般化された仮想上の出来事を述べるものであり、これはヴァーチャル・プレイン上で想起するものとして捉えられる。これにより認知主体は主語名詞句の属性を現実的な時間の流れとは無関係に恒常的な性質として捉えることが可能になるわけである。

次に属性文としての ITRC の概念化のプロセスをプレイン・モデルから考えてみたい。上で見たように、ITRC は属性文であるということは、個体レベル叙述の一種に相当する。従ってヴァーチャル・プレイン上で想起される事態であると考えられる。ITRC の概念化のプロセスは次のように図示することができる。

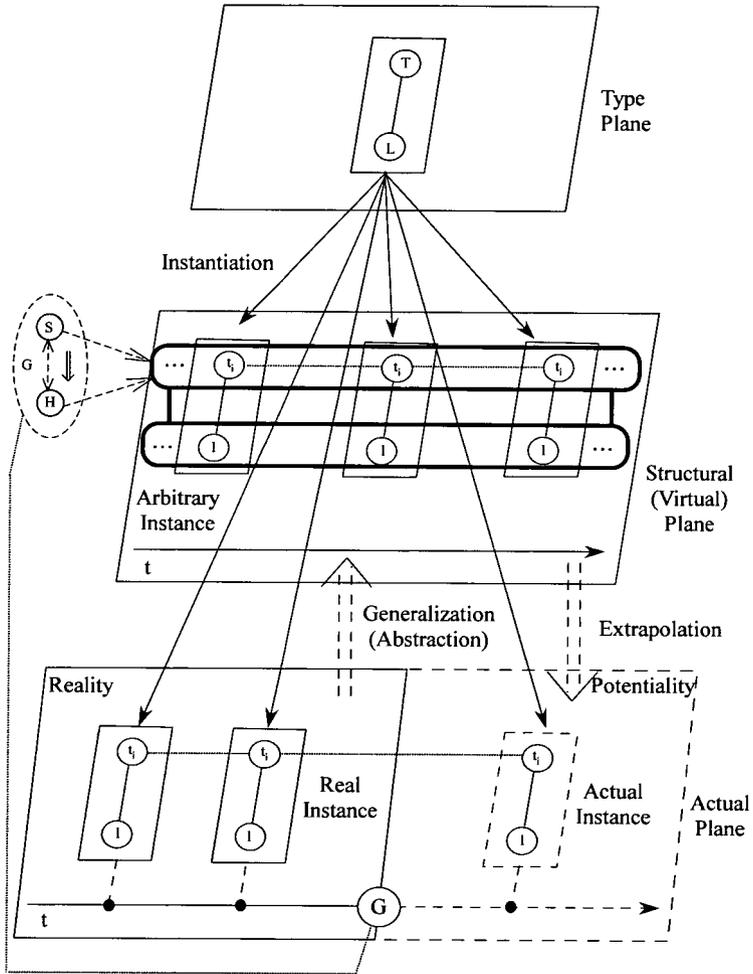


図13：ITRCの概念化の認知プロセス

- (27) a. Our new washing powder washes whiter! (Aarts 1997: 175)
 b. These revolutionary brooms sweep cleaner than ever. (=1a) (Aarts 1995: 85)
 c. The new mop polishes cleaner.

((23)を再掲)

この構図では、ITRCを概念化する前提として、認知主体はアクチュアル・プレイン上で想起される現実が生じるような個々の事態を捉えている。例えば(27)の例で言えば、“Our new washing powder washed clothes whiter!”, “These revolutionary brooms swept floors cleaner than ever.”, “The new mop polished floors cleaner.”などの局面レベル叙述で表されるような具体的個別の事態が前提にあるわけである。従って、この段階では認知主体は主語の属性だけに注意を当てているわけではなく、事態の事実性を意識しているため、個体レベル叙述のような属性文としての解釈は起こらない。また、この時点では認知主体はアクチュアル・プレイン上のGとラベル付けされたところから事態を捉えており、ここから事態は事実認識としてグランディングされ、故に動詞は過去時制で有標化されて、主題もグランディングされているため明示化されなければならない。¹⁹ 従ってこの段階ではまだITRCと呼べず、他動詞結果構文の一種にすぎない。²⁰

次の段階として認知主体はアクチュアル・プレイン上の具現化された事態を「一般化」を行うことでバーチャル・プレイン上に位置づけることとなる。ここで重要なことはこの一般化というのはアクチュアル・プレイン上の具現化された個々の事態の共通性・類似性を認知主体が見いだすことによって生じるということである。例えば、認知主体は先にみた“Our new washing powder washed clothes whiter!”, “These revolutionary brooms swept floors cleaner than ever.”, “The new mop polished floors cleaner.”などの局面レベル叙述で表されるようなそれぞれの事態の反復性などから共通性・類似性を見いだそうとしているわけである。そして、そのような比較を通じて、認知主体は一般化を行い、認知主体の仮想の概念空間上、すなわちヴァーチャル・プレイン上に一般化された恣意的な事態を思い描くこととなる。ここでいう一般化された恣意的事態とは認知主体が想起する時間の流れを超越したグランディングを受けないような漠然とした事態である。そして、認知主体は類似性・共通性を捉えようとするため、個々の漠然とした事態をまとめた集合体、つまり「高次の実体 (higher-order entities)」として捉えることとなる。²¹ 図13の構図の中ではこの高次の実体の集

合体はヴァーチャル・プレイン上の太線で示された部分に相当する。

さらに次の段階として、グランディング、特に名詞のグランディングが関与してくるのだが、認知主体はアクチュアル・プレイン上のGと同一指示であるヴァーチャル・プレイン上の横に離脱(displacement)した認知の拠点Gから事態を捉えることとなる。この現実空間から仮想空間への離脱は一般化された恣意的な事態をヴァーチャル・プレイン上で処理するために必要な認知操作(cognitive operations)のひとつとして考えられる。つまり、ここでいう離脱とは3.3節でみた外界直接型認知から外界間接型認知へ移行するために必要な認知プロセスなわけである。そして認知主体は離脱に伴い一般化された恣意的な事態の中から、まず最も際立つものとして道具主語名詞句に「注意(attention)」を向け、その名詞句がグラウンドされることになる。図13ではこの様子はSから伸びる破線矢印で示されている。これにより、認知主体は主語名詞句の属性に注目しはじめることとなる。²²そして認知主体は一般化によって得られた恣意的な事態の責任がこの主語名詞句の属性にあると考え始めることとなる。さらにそうした属性の促進によってエネルギーが発生するため、その力が道具(INSTR)から主題(TH)にさらに伝達され、その力を受けた主題が結果述語で言語化される状態に変化するという事態が想起されるわけである。その結果、個体レベル叙述である属性文としての属性文解釈が(27)のようなITRCで発生するのである。

次に、ITRCの概念化プロセスの中でも主題の非明示化と動詞が現在時制でグラウンドされる認知的動機付けについて考えてみたい。先に述べたように、ITRCは主語名詞句の属性を表す属性文であるわけなのだが、影山(編)(2011)は属性文において次の例のように目的語の省略がおきやすいことを指摘している。

(28) a. Dogs bite, and cats scratch.

b. Humans destroy with guns and bombs, nature with wind and rain.

c. Football hooligans are bad, but they don't often murder.

(下線は原文)(影山(編)2011: 115)

なぜ属性文では目的語の省略が起こるのかということに関して、影山(2003)は次のような「時間の識別性(temporal distinguishability)」という概念を提案している。²³

- (29) 時間が識別できる文というのは、具体的にいつその出来事が起こったかが明らかであるから、項の識別度が高くなる。他方、時間の流れが識別的な文というのは、特定の時間だけに限られない恒常的な状態を表す。時間の識別度が低いということは、「誰が何を」という文を構成する要素を個別化しにくいということであり、その分、主語や目的語が不定ないし総称になったり、非表示になったりして、他動性が下がる。

(影山 2003: 278)

しかしながら、この主張には以下の疑問点が残る。ひとつは「時間の識別度が低い」とされている総称文がなぜ現在時制をとるのかという点である。換言すれば、特定の時間だけに限られない恒常的な状態を表す属性文がなぜ現在時制をとるのかということが示されていない。もうひとつは「時間の識別度が低い」ことによってなぜ「誰が何を」という文を構成する要素を個別化しにくくなり、目的語が非表示になったりして他動性が下がるのだろうか？これに関して影山(2003:278)は「出来事文を属性文に靴替えることによって、自動詞化が起こる」と述べているが、これにも疑問点がある。つまり、出来事文を属性文に靴替えるということは、裏を返せば、基底構造としての出来事文から統語的な派生を経て属性文が得られるということになる。これに関して、影山(ibid.)及びKageyama(2002)などは「出来事項(event argument)の抑制(suppression)」という概念を提案しているが、次の(30)の文、特に(30a)に関しては本稿でいうITRCに相当するが、これについては(31)のような原理に説明的基盤を求めている。

- (30) a. These revolutionary new brooms sweep cleaner for years.
b. Tigers only kiss at night.

(Goldberg 2001; quoted by Kageyama 2002: 94)

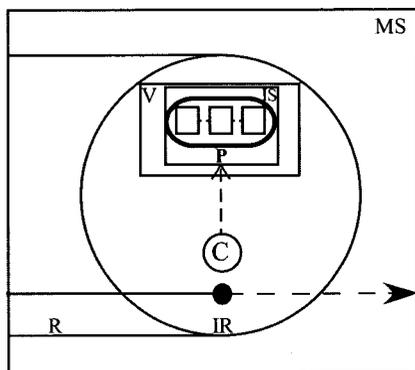
(31) On our view, these sentences also involve e-suppression, [...], the e-suppression here atypically induces the backgrounding of internal arguments by highlighting the external argument as the topic of the characterizing predication.

(ibid.)

しかし、(31)の中では、ITRCがなぜ項の抑制により一時的に(atypically)自動詞化を引き起こすのか、つまり、その一時性とはどのような原理により生じるのかということに説明が与えられていないという問題点がある。以上の問題点を踏まえて、以下の議論ではこれらに代わる説明的基盤を認知文法と共同注意の観点に求めていきたい。

まず、第1の疑問としてなぜITRCが現在時制でグラウンドされるのかということについて考えてみたい。ITRCの現在形はもちろんグランディングを反映している。つまり、図13ではGが2つ想定されており、先に述べた通り、同一指示で点線の対応関係で結ばれている。ヴァーチャル・プレイン上の横のGはアクチュアル・プレイン上のGから離脱し一般化された恣意的事態の主語名詞句の属性とその遂行に注意を向ける認知主体の意識を捉えたものであるが、アクチュアル・プレイン上のGの役割のひとつには言語化のための発話事態(speech event)を捉え事態、特に動詞をグランディングするという役割がある。つまり、図14の通り、認知主体(conceptualizer, C)は現実(reality, R)の中で現在の「今・ここ」(immediate reality, IR)の位置からヴァーチャル・プレイン上(virtual plane, V)で想起される太線で示された高次の(higher-order)仮想事態(profiled occurrence, P)が成立するものと推測(epistemic) (破線矢印)して発話を行っており、言い換えれば、認知主体はアクチュアル・プレイン上のGからヴァーチャル・プレイン上の仮想事態が発話と同時に成立しているものとして思い描いていることになるため、現在時制でグラウンドされるわけである。従って、特定

の時間だけに限られない恒常的な状態を表す属性文としての ITRC の現在時制は時間の識別度が低いために生じるとは短絡的には言えず、影山(2003)の議論は他に説明的基盤を求めなければならないわけである。



(cf. Langacker 2009: 210)²⁴

図14：ITRCにおける現在形の認知構造

次に第2の疑問の主題の非明示化のメカニズムについて議論していく。先の2.2.1節では以下のITRCの主題非明示化の認知メカニズムを確認した。

(32) The Cognitive Mechanism of Object Omission of ITRCs:

Object omission in ITRCs occurs (i) when the particular object is fairly unimportant as the pragmatic focus is on the activity itself, and (ii) when the identity of each of the omitted objects is easily induced from the context of the script of the verbal event or from associations engendered by other lexical items in the string.

((16)を再掲)(Tsushima 2010a: 76)

本稿ではこれらの認知的基盤として図13でみた ITRC の概念化の認知プロセスが関与していることを指摘したい。先に見たように、認知主体は ITRC を概念化する際にヴァーチャル・プレイン横の位置の G から認知するわけであるが、この際に話し手(S)は高次の主語名詞句(図中ではヴァーチャル・プレイン上の上側の太線四角)の属性に注意を払い、その属性の遂行によって得られる出来事を概念化するわけである。

まず(32)のメカニズムの(ii)に関係する認知的動機付けから考えてみたい。例えば(27)の ITRC の非明示化された主題を考えれば、(27a)では不定名詞句の「洗える物 (clothes, shirts, sheets)」であり、これは「洗う」という事態から推測可能なプロトタイプ的名詞である。同様に、また(27b, c)の非明示的主题は掃くことができる不定名詞句の「床(floors)」などであるが、これも「掃く」という事態から推測可能なプロトタイプ的なものである。

次に(32)の(ii)に関わる認知的動機付けを考えるのに当たり、特に ITRC の概念化の認知プロセスの中でも、3.3節で明らかにした「共同注意」の役割が重要となってくる。ITRC の概念化において、話し手(S)はバーチャル・プレイン上の横位置の G から聞き手(H)に話し手の注意の対象と同じ主語名詞句とそれに伴う属性に注意を向けさせ、三項関係、つまり共同注意が成立することとなる。ここで重要なことは、話し手も聞き手も同じ指示対象としての主語名詞句とその属性に注意を払っているということである。従って、認知的に際立っている主語名詞句を最も際立つトラジェクター(tr)として主語で言語化するわけであり、それに伴う属性描写を動詞句以下で言語化することとなる。しかし、ここでの話し手と聞き手の注意は主語名詞句の属性とその遂行にしか向けられていないので、主題は主語の属性描写の一部には概念的に含まれてはいるだろうが、主題の指示対象にそれほど注意を払う積極的な理由がない。従って、主題は概念的に有意味のランドマーク(lm)として想起されるのであろうが、属性の遂行に関わる事態から推論可能なプロトタイプの名詞を漠然と思い描いているにすぎなく、言語化のレベルでは話し手(S)と聞き手(H)の注意の対象とはならないため、記号化される必要がないわけである。

また(i)の基準、つまり、語用論的焦点が行為自体に当てられ、特定の目的語がそれほど重要ではなくなると、主題が非明示化されるわけであるが、これは共同注意の観点からすると、Kageyama(2002)及び影山(2003)の(31)の主張のように、主題は統語レベルでの項の抑制によってアプリアリかつ一時的(atypically)脱落するわけでも、影山(2003)による(29)の時間の識別度が低いからだけではなく、認知主体の概念化プロセス、つまり、話し手も聞き手も同じ指示対象としての主語名詞句とその属性の遂行に共同注意を払っているわけであり、認知的に注意が届かない主題に敢えて注目を払う積極的な理由が認知的に見いだせないため、非明示化するということとなるわけである。影山(2003)のいう時間の識別性が低いという概念は本稿の概念化プロセスとの関連で言えば、アクチュアル・プレイン上からヴァーチャル・プレイン上に事態を一般化する際に生じる一側面にすぎないわけである。

以上、この節ではITRCの認知プロセスを提案し、その認知プロセスの反映という観点からITRCの言語現象に統一的に自然な認知的動機付けを与えることが可能であることを議論してきた。

5. 結 論

本稿では、認知文法の理論面とITRCという現象面に焦点を置き、議論を進めてきた。まず、理論面では発達心理学の共同注意という概念は認知文法のグランディング、コントロール・サイクル・モデルと統合可能であることを考察し、そのモデルを提案した。また、現象面ではまずITRCの構文的環境を概観し、ITRCの事態認知モデルを提起した。これにより、ITRCは属性文であり、さらに概念化の背景には言語化できないものの背景化された動作主が間接的に関与していることにより、道具主語が属性遂行の直接的操作を行う責任を持つ存在となるという自然な認知的基盤が与えられた。さらに、ITRCの概念化の認知プロセスを提案し、ITRCの現象的側面としての性質として、ITRCの属性文解釈とはどのような認知操作によって生じるのか、なぜ現在時制でグラン

ドされやすいのか、なぜ主題は非明示化されるのかということに対して、認知プロセスの観点から自然で一環した説明を与えることができることを議論してきた。

<注>

- 1 ただし、Aarts(ibid.)は「主題非明示型結果構文(Implicit Theme Resultative Constructions)」という呼称は使用せず、この言語現象を特に名付けていない。
- 2 適切な文脈が与えられれば典型性は下がり周辺的な事例となるが、人を主語とするものも許されることがある。人を主語としたITRCの分析についてはTsushima(2010a)及び對馬(to appear)を参照のこと。
- 3 典型性はかなり下がるが、適切な文脈が与えられれば過去形のITRCも容認されることがある。詳しくはTsushima(2010a)を参照のこと。
- 4 Goldbergは本稿でITRCと名付けている構文に関して、特有の名称を与えておらず、目的語が脱落した構文の総称名として「脱プロファイル化目的語構文(Deprofiled Object Construction, DOC)」と呼んでいる。ここでの原理もITRCだけに適応する概念ではなく、DOC全体に適用可能と考えられている原理である。
- 5 ここで言うThe sentenceとは能動受動態、すなわち、いわゆる中間構文である例を指しているのだが、本稿では主語の属性という意味においてはITRCにも通ずる概念であると考える。
- 6 ただし、Verhagen(ibid.)は直接的に共同注意(joint attention)という用語を用いていないようであるが、類似した概念が垣間みられるのでここで指摘しておくこととする。
- 7 また本多(2011)は発達心理学の大藪(2004a)に基づき、共同注意を以下の通りまとめている。
 - a. 前共同注意：生後2か月頃まで
 - b. 対面的共同注意：生後2か月頃から
 - c. 支持的共同注意：生後半年頃から

d. 意図共有的共同注意：生後9か月頃から

e. シンボル共有的共同注意：生後15ないし18か月頃から

(本多 2011: 128)

特に d の共同注意の発生辺りに大人と子供が同じ物を注意するという三項関係の共同注意が成立し、これがこれ以降のコミュニケーションの中心的役割となっていくことから「9ヶ月革命」(cf. Tomasello 1999)と呼ばれることがある。

8 2012年1月5日現在

9 Langacker はグラウンドされる前のモノを noun (名詞)、グラウンドされたモノのことを nominal (名詞句) とグラウンドされる前の事態を単に process (プロセス)、グラウンドされた後の事態を the process grounded by a finite clause (定形節にグラウンドされたプロセス) と区別していることに注意したい。

10 ただし、話し手や聞き手は onstage 上で I や You として同一指示となり言語化されることはあり得るが、この場合は offstage 上の話し手がいわば「分身」としての分裂した自己が onstage の I を、また offstage 上の聞き手が onstage 上の分身の You を捉えているという構図になっていることに注意されたい (cf. 濱田・對馬 2011)。

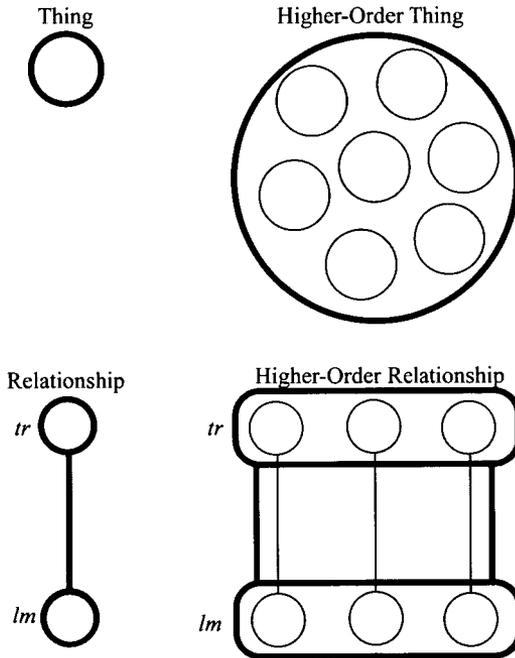
11 ここでの話し手(S)による二重矢印線で示されている客体(O)を聞き手(H)の意識野に導入するという概念は、話し手(S)と聞き手(H)間でのインタラクションのやり取りの中で聞き手(H)が自然に意識するようになるものという風に捉えられないこともないが、本考では、発話行為事態の中で話し手の発話行為による効果を明らかにするために敢えて明確にする必要があると考えている。

12 ここでの二重線矢印で示されている関係に関しても注11で述べたことと同様なことが言える。

13 本来は話し手(S)側のコントロール・サイクルや支配域(Ds)・場(Fs)や実際の発話事態における現在の談話スペース(current discourse space, CDS)も記述する必要があるが、ここでは図式を簡略化するために省略している。

- 14 Goldsmith and Woisteschlaeger は “phenomenal” と “structural” という区分が進行形と現在単純形に固有の特徴としているが、Langacker (1996, 1997) では進行形でも “structural” の意味を表すことがあることを指摘していることに注意されたい。
- 15 もちろん、ここでいう「プレイン」という概念は概念空間を示すためのメタファーである (cf. Langacker 1999b)。
- 16 この節の議論は Tsushima (2010a: Ch.4) の 4.3.2 節に大幅に加筆・修正を施したものを含んでいる。
- 17 中間構文では、主語名詞句に行為の促進 (facilitation) と抵抗 (resistance) を表す二面性があるが、ITRC では基本的に否定文にできない側面があるため、このモデルでは抵抗 (resistance) は表記していない。
- 18 さらに益岡 (1987, 2004, 2008 など) の言う「叙述類型論」の観点から言うと、属性文は「属性叙述 (Property Predication)」に相当し、いくつかの種類に下位分類することができる。詳しくは益岡 (ibid.) を参照のこと。
- 19 ここで主題は一見すると限定詞によりグランディングを受けていないような印象を受けるが、実際には言語化はされないゼロ ϕ によりグランディングを受けていると考えられている。詳しくは Langacker (2002b) を参照のこと。
- 20 典型的な「結果構文 (Resultative Construction)」は通常、状態変化による結果状態を表すため、過去形としてグランディングされることはあっても、今現在の一瞬を表す現在進行形や未来時の可能性を表すことはない。
- 21 3.1 節のプロファイルの議論でみたように、認知主体はある表現を思い描こうとする際、モノ (thing) もしくは関係 (relationship) に認知的に際立ちを与えプロファイルするが、モノと関係というのは統一的にまとめて実体 (entity) と呼ばれる。また、認知主体はモノや関係をひとつにまとめて集合的に捉えることも可能である。この集合体のことを認知文法では、高次のモノ (higher-order thing) や高次の関係 (higher-order relationship) と、また統一的に高次の実体 (higher-order entity) と呼ぶ。この様子は図 A に描かれている。たとえば、高次のモノとは “group, stack, pile” などといったものが、また高次の関係とは

“Three boys ran up the hill.”のような事態を指すが、いずれの場合においても、個々のモノや事態を離散的に認識しているのではなく、個々をまとめあげて集合的に捉えているわけである。



(Langacker 1996: 291)

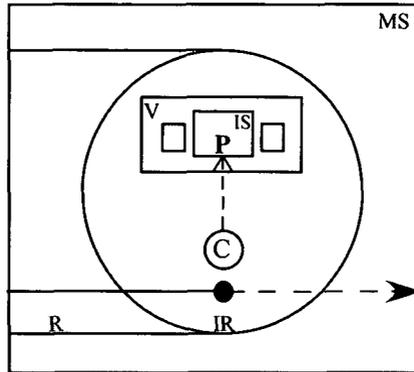
図A：高次の実体 (higher-order entities)

22 厳密に言えば、この前段階として、認知主体は動作主としての人間かもしくは道具かのどちらかに注意を当てるのかということを選択していることとなる。

23 この背景として Kegeyama(2002), 影山(2003)などでは統語レベルで「項の抑制」が起こり出来事文が属性文に派生することで自動詞化が起これと考えていることにも注意されたい。

24 Langacker(ibid.)の現在時制を捉える元々のモデルは以下の通りであるが、ヴ

ヴァーチャル・プレーン上での高次の実体を正確に描くために本論では修正を加えている。



(Langacker 2009: 210)

図B：ヴァーチャル・プレーン上の事態の現在時制の認知構造

<参考文献>

- Aarts, Bas. 1995. "Secondary predicates in English." In: Bas Aarts and Charles F. Meyer (eds.) *The verb in contemporary English*. 75-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Aarts, Bas. 1997. *English Syntax and Argumentation*. Basingstoke: Macmillan Press.
- Goldberg, Adele E. 2001. "Patient Arguments of Causative Verbs Can Be Omitted: The Role of Information Structure in Argument Distribution." *Language Sciences* 23. 503-524.
- Goldberg, Adele E. 2005a. "Argument Realization — The role of constructions, lexical semantics and discourse factors." In: Jan-Ola Östman and Mirjam Fried (eds.) *Construction Grammars: Cognitive grounding and theoretical extensions*. 17-43. Amsterdam: John Benjamins.
- Goldberg, Adele E. 2005b. "Constructions, Lexical Semantics, and the Correspondence Principle: Accounting for Generalizations and Subregularities in the Realization of Arguments." In: Nomi Eriteschik-Shir and Tova Rapoport (eds.) *The Syntax of Aspect*. 215-302. New York: Oxford University Press.
- Goldsmith, John and Erich Woisetschlaeger. 1982. "The Logic of the English Progressive." *Linguistic Inquiry* 13, 1. 79-89.

- 濱田英人・對馬康博. 2011. 「Langackerの主観性(Subjectivity)と主体化(Subjectification)」『文化と言語』札幌大学外国語学部紀要. 第75号. 1-49.
- 本多 啓. 2011. 「共同注意と間主観性」澤田治美(編)『主観性と主体性』127-148. 東京: ひつじ書房.
- Jespersen, Otto. 1927. *A Modern English Grammar: on Historical Principles*. Part 3: Syntax. London: George Allen and Unwin Ltd.
- Kageyama, Taro. 2002. "On the Role of Event Argument in Voice Alternation." 『人文論究』(*Humanities Review*). Vol. 52, 1. 79-96.
- 影山太郎. 2003. 「動作主属性文における他動詞の自動詞化」語学教育研究所(編)『市河賞36年の軌跡』271-280. 東京: 開拓社.
- 影山太郎(編) 2011. 『名詞の構文と意味』東京: 大修館書店.
- Krifka, Manfred. et al. 1995. "Genericity: An Introduction." In: Carlson, Gregory N. and Francis Jeffery Pelletier (eds.) *The Generic Book*. 1-124. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George. 1977. "Linguistic Gestalt." *CLS* 13. 236-287.
- Langacker, Ronald W. 1987. "Grammatical Ramifications of the Setting / Participant Distinction." *BLS* 13. 383-394.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1996. "A Constraint on Progressive Generics." In: Adele E. Goldberg. (ed.) *Conceptual, Structural, Discourse, and Language*. 289-302. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. 1997. "Generics and habitual." In: Angeliki Athanasiadou and René Dirven (eds.) *On Conditionals Again*. 191-222. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1999a. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1999b. "Virtual Reality." *Studies in the Linguistic Sciences* 29.2. 77-103.
- Langacker, Ronald W. 2001. "The English present tense." *English Language and Linguistics* 5.2. 251-272.
- Langacker, Ronald W. 2002a. "The Control Cycle: Why Grammar is a Matter of Life and Death." 『日本認知言語学会論文集』Vol.2. 193-220.
- Langacker, Ronald W. 2002b. "Remarks on the English grounding systems." In: Frank Brisard (eds.) *Grounding: The Epistemic Footing of Deixis and Reference*. 29-38. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

主題非明示型結果構文の概念化の世界－認知文法と共同注意によるアプローチ(對馬康博)

- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志. 2004. 「日本語の主題－叙述の類型の観点から」 益岡隆志(編) 『主題の対照』 3-17. 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志. 2008. 「叙述類型論に向けて」 益岡隆志(編) 『叙述類型論』 3-18. 東京: くろしお出版.
- 大藪泰. 2004a. 『共同注意』 東京: 川島書店.
- 大藪泰. 2004b. 「共同注意の種類と発達」 大藪泰・田中みどり・伊藤英夫(編) 『共同注意の発達と臨床』 東京: 川島書店.
- Rice, Sally. 1988. "Unlikely Lexical Entries." *BLS* 14. 202-212.
- Tomasello, Michael. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge: Harvard University Press.
- Tomasello, Michael. 2003. *Constructing a Language*. Cambridge: Harvard University Press.
- 對馬康博. 2007. 「主題非明示型結果構文の構文的環境とそのカテゴリー形成」 『日本認知言語学会論文集』 Vol. 7. 277-287.
- Tsushima, Yasuhiro. 2008. "The Categorization of Constructional Families: Implicit Theme Resultative Constructions, Resultative Constructions, and Middle Constructions." *Culture and Language*. No.69. 69-104. Sapporo: Sapporo University.
- Tsushima, Yasuhiro. 2010a. *A Cognitive Linguistic Study of Implicit Theme Resultative Constructions and Their Related Constructions*. Doctoral Dissertation. Hokkaido University.
- 對馬康博. 2010b. 「主題非明示型結果構文の意味論的・語用論的特徴付け」 『日本認知言語学会論文集』 Vol. 10. 226-236.
- 對馬康博. to appear. 「主題非明示型結果構文の主語名詞句に関する意味的・語用論的制約について」 『日本語用論学会大会発表論文集』 第7号. 掲載予定.
- van Oosten, Jeanne Hillechiena. 1977. "Subjects and Agenthood in English." *CLS* 13. 459-471.
- van Oosten, Jeanne Hillechiena. 1984. *The Nature of Subjects, Topic and Agents: A Cognitive Explanation*. Ph.D. Dissertation. University of California, Berkeley.
- Verhage, Arie. 2005. *Constructions of Intersubjectivity*. New York: Oxford University Press.
- Verhage, Arie. 2007. "Construal and Perspectivization." In: Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens (eds.) *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. 48-82. New York: Oxford University Press.
- Wittgenstein, Ludwig. 1953 [2001, 3rd ed.]. *Philosophical Investigations*. Malden/Oxford: Blackwell Publishing.